

Y4-19

入院案内に関する役割分担
—DVDの活用・患者案内・情報の収集
方法の改善—姫路赤十字病院 看護部¹⁾、副院長²⁾○森本 敦子¹⁾、坂本 佳代子¹⁾、安川 尚子¹⁾、
駒田 香苗¹⁾、田内 千恵子¹⁾、中島 晃²⁾

【はじめに】平成19年12月28日厚生労働省医政局長通「医師及び医療関係職と事務職員との間等での役割分担の推進について」を受け、当院ではプロジェクト活動を踏まえて業務役割分担委員会を発足し、安全な医療と質の向上にための役割分担を進めている。その中のひとつとして入院患者に対する案内説明業務の一部事務職員への委譲と役割分担について検討し、入院期間が短縮され入院して即日あるいは数日中に検査や手術等を受けられる患者にとって必要な患者情報の収集と対応を入院までに看護師が担えるよう業務調整したので報告する。

【方法】1.入院案内項目と内容の一覧表作成2.事務職員との役割分担3.入院案内のDVD作成4.入院までに必要な準備を整備するための患者面接の実施と生活指導

【結果】業務内容を一覧にすることで案内業務と看護師が実施する専門的な説明・指導内容かどうかを客観的に多職種間で検討し仕分けすることにつながった。外来診療や入院に際して必要な情報をDVD等作成によって患者に一貫して提供するシステムにつながった。DVD作成は間接的に患者にかかわる全職員のオリエンテーションとしても有効に活用できる。説明業務を委譲したことで看護師は患者の健康状態に関する情報を集約して収集でき、安全な入院生活のスタートとなるよう質の向上につながる体制に近づいた。

Y4-20

医療クラーク制は「医療崩壊」を食い
止められるか？
～乳腺外科診療の場合～

石巻赤十字病院 乳腺外科

○古田 昭彦

現在、地方の基幹的急性期病院において勤務医の業務量が増加傾向にあり、医師の疲労度や診療の精度に悪影響を与えているのが現状である。乳腺外科においてその傾向が顕著である。背景には受診者・患者の集中・増加に加え説明事項の多岐化、書類数の増加、電子カルテの導入による医師自身の作業量の増加、そしてこの状況に対応すべきマンパワーの増援が種々の事情から叶わぬことなどがあるものと推察される。当施設では平成20年度の診療報酬改定で「医師事務作業補助体制加算」が導入されたことを契機として医療事務作業補助者（医療クラーク）の採用がなされ、早速乳腺外科への配置措置がとられた。主な業務は外来診療補助（PC入力代行、紹介状の作成、PHS管理を含めた他部門との情報の伝達業務、その他医師が行っていた雑用全般）、各種診断書の下書き、などである。医療クラーク配置後から約1年を経過した時点での利害得失を医師の立場から列挙する。1. 様々な雑用から開放され患者の診察に集中できるようになった。2. 時間外業務が劇的に減少した。3. 診断書、報告書の作成が迅速となり患者や他施設からの不満の解消が得られた。4. 患者（女性）と1対1となる状況が皆無となった。等である。さらに看護師からみても業務量の減少などメリットが挙げられた。加えて種々の統計表の作成など、これまで必要と感じながらも実現できなかった新規の業務もこなしてもらえるようになった。コスト面も含め現時点でデメリットは見当たらない。

【結論】いわゆる「医療崩壊」は国家の医療行政の戦略的過ちとそのため生じた医療の現場での様々な歪みの総体であり、医療クラーク制の導入・活用がこれを救うことは無論ありえない。しかしながら、現場で呻吟する医師のQOLの改善という点においては非常に有用である。